

ワークショップ 15

「消化管希少疾患の病態、治療に関する最新のエビデンス」

司会 久松 理一（杏林大学医学部消化器内科学）

柿本 一城（大阪医科大学第二内科）

小腸検査法の発達や遺伝子あるいは腸内細菌叢研究の進歩により、消化管希少疾患に関する新たなエビデンスが集積しつつある。

我が国で提唱された非特異性多発性小腸潰瘍症では責任遺伝子 SLC02A1 が同定され新たに CEAS という疾患名が提唱された。炎症性腸疾の患者の中に MEFV 遺伝子 SNP を伴いコルヒチンが著効する患者が存在することが明らかになりつつあり、MEFV 遺伝子関連腸炎という概念が提唱されつつある。好酸球性消化管傷害も日本人では増加傾向にあり食物アレルギーとの関連が注目されている。また、今後解明されなければならない日本人セリアック病、クローンカイト・カナダ症候群などの希少難病に対する新たな取り組みも注目される。本ワークショップでは消化管希少疾患の病態、診断、治療に関する最新のエビデンスに関する幅広い演題を募集する。